

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	愛知県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	名古屋市立大森中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	5	5	6	1	17	34
生徒数	194	191	208	3	596	

研究の概要

1. 研究主題

見つめよう自分を！ 伸ばそうよさを！ - 基礎・基本の定着を図る教育の実践 -

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

少人数指導 <ul style="list-style-type: none"> 1年生・英語(各学級週3時間) 小学校の総合的な学習の時間等で英語を学習してはいるが能力差が少なく、生徒の実態を十分に把握しにくい 1年生・数学(各学級週3時間) 生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため。 T・T指導 <ul style="list-style-type: none"> 2年生・理科、英語(各教科とも各学級週1時間) 生徒の理解の状況に差が出ているため 3年生・数学、音楽(各教科とも各学級週1時間) 数学は生徒の理解の状況に差が出ているため。音楽は技能習得の援助するため。 選択教科 <ul style="list-style-type: none"> 2年生では8教科(国4、社2、数1、理2、音2、技1、保体1、英1)14コース 3年生では8教科(国3、社4、数1、理5、音2、技2、保体4、英3)24コース 各教科ともに得意、不得意があり、基礎・基本を定着させるためには多様な教科選択が必要であるため。

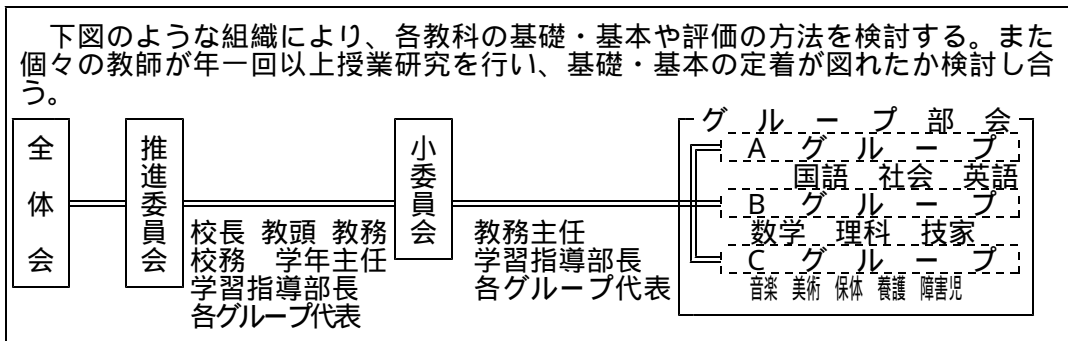
(2) 年次ごとの計画

平成15年度	テーマ 見つめよう自分を！ 伸ばそうよさを！ - 基礎・基本の定着を図る教育の実践 - 研究の見通し 個に応じた指導のための指導方法や指導体制の工夫改善を図れば、基礎・基本を身に付け、それをもとに表現力や思考力など様々な能力を伸ばすことのできる。 研究の内容・方法 ア 全教職員が研究を進めるための指導体制 (3)の組織により、各教科の基礎・基本や評価の方法を検討する。また、一教師一実践を行い、基礎・基本の定着が図れたか検討する。 イ 学級2分割の少人数指導 1年の数学、英語で年間を通じ、週3時間すべての授業について、各学級を2分割し、少人数の編成方法や指導法について研究を進める。 ウ T・Tによる指導 2年理科で、年間を通じ、週1時間T・T指導を実施し、生徒の興味・関心や習熟度に応じた指導法について研究を進める。
--------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

工 補充・発展的な選択教科
 2年生では、国語、社会、数学、理科、音楽、保体、技術、英語の8教科14コース、3年生では、国語、社会、数学、理科、音楽、保体、家庭科、英語の8教科24コースで実施し、必修教科の内容とかがかわらせ、補充・発展的な学習に応じた教材開発に努める。

平成16年度
 テーマ
 見つめよう自分を！ 伸ばそうよさを！
 - 基礎・基本の定着を図る教育の実践 -
 研究の見通し
 個に応じた指導のための指導方法や指導体制の工夫改善を図るとともに、平成15年度の課題である評価の方法の工夫、習熟別の少人数指導を実施すれば、より一層基礎・基本を身に付け、それをもとに表現力や思考力など様々な能力を伸ばすことのできる。
 研究の内容・方法
 平成15年度の研究内容・方法をもとに課題を克服することができるように研究を進める。

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

実践事例：1年英語科少人数指導

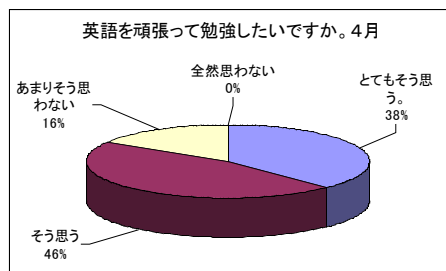
(1) 少人数指導の分け方とその理由

1年5学級の各学級を2分割にする。分割することについては、小学校の総合的な学習の時間等で英語を学習してはいるが能力差が少なく、生徒の実態を十分に把握しにくいためである。

(2) 生徒の実態

右のグラフは、4月、英語を学習し始めたときのアンケート結果である。

多くの生徒は頑張って「英語を勉強したい」と答えたが、16%の生徒が「あまり勉強したくない」と答えている。その主な理由は次のとおりである。



- ・ 勉強がもともと苦手だから英語も勉強したくない。
- ・ 単語や文を覚えることがいやだから。
- ・ すでに塾で英語を習っているから、学校でこれ以上勉強したくない。

英語を頑張って勉強したいと思う生徒の気持ちを持続させ、あまりそう思わない生徒を頑張ろうという気持ちに変化させるためには、基礎・基本の定着を図り、分かる喜びを味わわせることが大切であると考えます。

(3) 基礎・基本の定着を図るための手だて

ア 教師が授業の中で、できるだけ既習の英語を使う。
 教師が授業の中でできるだけ日本語を使わず、既習の英語を使うようにする。このことによって、学習した英語をどう使うとよいのが生徒に提示することになり、生徒の英語を使う機会を増やすことになると考える。

- イ 既習事項の英問英答を全員と毎時行う。
毎時の授業で全員と英問英答することは、生徒が既習事項を理解しているかどうかを把握しやすい。また、正確に答えられない生徒にはヒントを与え最終的に自分の力で表現できるように粘り強く問答の練習をする。
- ウ すらすら言えるまで音読を何回も行う。
ペア読みやシャドーリーディング（CDの後について同時に読む）などの読み方の練習方法を工夫し、英語独自のリズムや音を口にする楽しさを味わわせるようにする。そして、暗唱まで近づけ既習事項の定着を図る。
- エ 生徒個々の良さを見付けほめることを大切に、失敗を気にしない雰囲気づくりに努める。

間違いを指摘するだけでなく、答えたことをほめ、やる気をなくさせないようにする。これによって、英語が通じる喜びや英語で対話する楽しさを味わわせ、のびのびとコミュニケーションできる雰囲気をつくることのできる

(4) 授業の様子

授業の冒頭で、英語で友達とペアであいさつをした後、互いに自分で考えた質問をしあった。そして、教師が何を友達に聞いたか尋ね、正しく問答できたか確認した。

教師： What is your question?
生徒A： Do you often watch TV?
教師： Good! 正確な英語で質問できて、Nice! How about B?
生徒B： えっと、What do you like food?
教師： 大きい声で言えて Good! しかも習ったばかりの what を使うことにチャレンジできたね。Great! ただ惜しかったのは What の後に food が入るよ。What food do you like? だと正確だよな。
生徒B： あっ、そうだった。What food do you like?
教師： That's right. Very good!

その後、教科書を教師の後について音読した。教科書を閉じて、暗唱に一生懸命に挑戦する生徒が何人かいた。一方、読み方を教科書に必死にメモしている生徒もいた。また、シャドーリーディングではCDが聞こえなくなるほど大きな声で音読する生徒もいた。それを教師がほめると、声を出すことをはずかしく思っていた生徒も必死で大きな声で音読しようとした。



【ペアで質問している授業風景】

(5) 生徒の変容

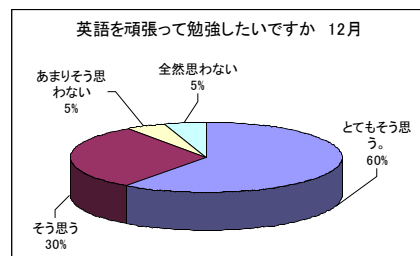
4月と12月のアンケート結果を比較すると、全体的に英語の勉強を頑張ろうと答えた生徒が増えている。その主な理由は次の通りである。

- ・ 英語をたくさん話すうちに英語がわかるようになってきておもしろくなった。
- ・ 発音が難しかったけど、友達と確認するうちにできるようになってうれしい。
- ・ 毎回同じことを繰り返すので英語を覚えることができ、先生に質問されても困らない。

しかし、右の表のように4月に頑張ろうと思っていた135人の生徒の中で、12月に18人の生徒の意欲が後退した。主な理由は次の通りある。

- ・ 繰り返し読むことがつまらない。

・ 何回も当たるから、いつも緊張していないといけないうえ、疲れる。
このように学習を繰り返し行うことは基礎・基本の定着を図る上で効果もあるが、学習意欲が後退することもあり、逆効果になることもある。今後、一人一人の性格などを今まで以上につかみ、学習効果を上げていきたいと考える。



[4月と比べ12月の方が意欲が後退した生徒]

- ・ とてもそう思う あまりそう思わない 2人
- ・ そう思う あまりそう思わない 7人
- ・ そう思う 全然思わない 3人
- ・ あまりそう思わない 全然思わない 6人

2. 今後の課題

ア 生徒理解について
 基礎・基本の定着を図れたかどうかは、テストや観察等を通して把握することはできる。そして、定着が図れていない生徒を指導するには、繰り返し同じことを学習させるだけでなく、その生徒が何につまずいているのかを把握する必要がある。指導法や教材を見直さなければならない場合もあるが、その生徒の性格などを考え指導しなければならないときもある。日ごろから生徒の活動の様子を観察するとともに生徒の自己評価を活用することも大切であるとする。今後、自己評価の活用について研究していきたい。

イ 少人数の学級集団の編制について
 今年度は、学級を等質の2分割で授業を行った。中学校で本格的に学習する英語においても、学習を進めていくと次第に学力差が出てくる。少人数であることから今までよりは個に応じた指導はしやすいが、よりの確な指導をするためには習熟度別の学級編制を考えていく必要がある。そのためには、生徒や保護者の理解を十分得なければならないとともに、評価方法についても検討していかなければならないとする。

学力把握のための学校としての取組

1 アンケート
 ア 目的：生徒の学習への関心・意欲を把握する。
 イ 実施内容：授業に積極的に取り組んでいるかなどの項目を4段階の自己評価をする。
 ウ 時期：4月 7月 12月に実施する。

2 小テスト
 ア 目的：生徒の学習へ基礎・基本の定着度を把握する。
 イ 実施内容：各単元の基礎・基本的内容を考える。
 ウ 時期：各単元終了時に実施する。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

年度末に研究成果をホームページに掲載する。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	1 5年度からの新規校	1 4年度からの継続校		
【学校規模】	3学級以下 7～9学級 13～15学級	4～6学級 10～12学級 16学級以上		
【指導体制】	少人数指導 その他	T・Tによる指導		
【研究教科】	国語 外国語 保健体育	社会 音楽 その他	数学 美術	理科 技術・家庭
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	